

6 研究協議の主な内容

(1) グループ協議の内容

【討議の柱1 知識を相互に関連付けてより深い理解に向かうことができていたか】

- ・ 前時までの実験の結果を基に考えることを通して、知識が相互に結び付いていた。
- ・ 深い学びに向かっているかどうかを判断するために生徒の様子をどのように見取るかが大切である。
- ・ 深い学びの実現のためには、目的意識をもったグループ交流を行うことが大切である。
- ・ 本時の課題を解決するための根拠が分かっていない生徒に対する支援が大切である。
- ・ 個人思考→全体交流→個人思考という学習過程の中で、学びを深めていた。

【討議の柱2 単元デザインは、生徒の「主体的・対話的で深い学びの実現」に結び付いていたか】

- ・ 単元デザインを貫く課題設定の段階で、いかに生徒の主体性を引き出すかが重要である。
- ・ 前時までの実験が、本時での課題解決に結び付くように設計されていた。
- ・ 単元のゴールを見据えた学びの積み重ねができていた。
- ・ 「単元を通して何を身に付けるか」というゴールを示すことは、指導者と学習者の双方にとって大切である。

(2) 指導主事の助言

〈旭川市教育委員会 教育指導課 主査 栄 耕平〉

① 「課題設定・見通し」について

- ・ 本単元の教材となる「鍵盤ハーモニカ」は、生徒に身近な道具であること、一見ただけでは音が鳴るしくみがわからないため、生徒の興味や疑問をもたせやすいこと、鍵盤ハーモニカで音を出すしくみを考えることが、単元の目標を達成するために有効であることなどから良い教材であったと考えられる。
- ・ 学習内容は、学習指導要領を確認した上で、生徒の実態に合わせ、内容が高度になりすぎないように配慮する必要がある。

② 「自己決定・自己選択」について

- ・ 生徒が鍵盤ハーモニカの音が鳴るしくみを知るための「問い」を考え、その「問い」を解決するため、実験を行っており、その過程で自己選択、自己決定する場面を設定していたことがよかった。
- ・ 生徒にどの場面で、何をどのように委ねるかを吟味することが重要である。本授業では、自分たちで実験した結果を根拠として、本時の課題を解決することができていた。

③ 「単元レベルの振り返り」について

- ・ ポートフォリオの活用については、生徒が探究活動を通してどのような思考の流れで解決したのかを可視化することができること、生徒の評価材料になるとともに授業改善の資料になること、教師が、生徒の思考の流れを把握することができることなどのメリットがあると考えられる。
- ・ ICTを効果的に活用し、振り返りをデータ化、ログ化することで、生徒が自分の学びを自覚したり、教師が生徒の思考の流れを把握したりすることができるだけでなく、他者参照することで深い学びにつながると考えられる。

〈上川教育局 教育支援課 義務教育指導班 主任指導主事 高嶋 優美〉

① 「発問」について

- ・ 本時では、「理科の見方・考え方カード」を活用し、生徒が理科の見方・考え方を働かせながら学習を進められるよう意図されていた。
- ・ 発問づくりにおいては、「どのような見方・考え方を働かせたか」ではなく、「育成したい資質・能力

が身に付いたか」を意識して行うことが大切である。

② 「必要感のある学び合い」について

- ・本時では、ICT の活用によって交流場面におけるアウトプットの仕方が工夫されていた。
- ・児童生徒一人一人が自身の課題解決に向けて、自分の好きなタイミングで、自分が知りたい内容について、他者参照したり友達に直接聞きに行ったりして交流し、自分の考えをまとめることが重要である。

③ 「本時レベルでの振り返り」について

- ・「振り返り」には、検証計画や観察・実験の処理など課題の探究を振り返る側面と、「主体的に学習に取り組む態度」を評価する側面がある。例えば、単元や授業の中で「試行錯誤した学習の状況を振り返る場面」を設定した場合、「①粘り強く取り組む態度」、「②①の中で自ら学習を調整しようとする態度」の2つの側面から評価する必要がある。
- ・振り返りの視点としては「どのような知識及び技能を習得したか」「誰とどのような対話をしたか」「何に気付いたか」などが挙げられ、これらを評価できる課題の設定が必要である。